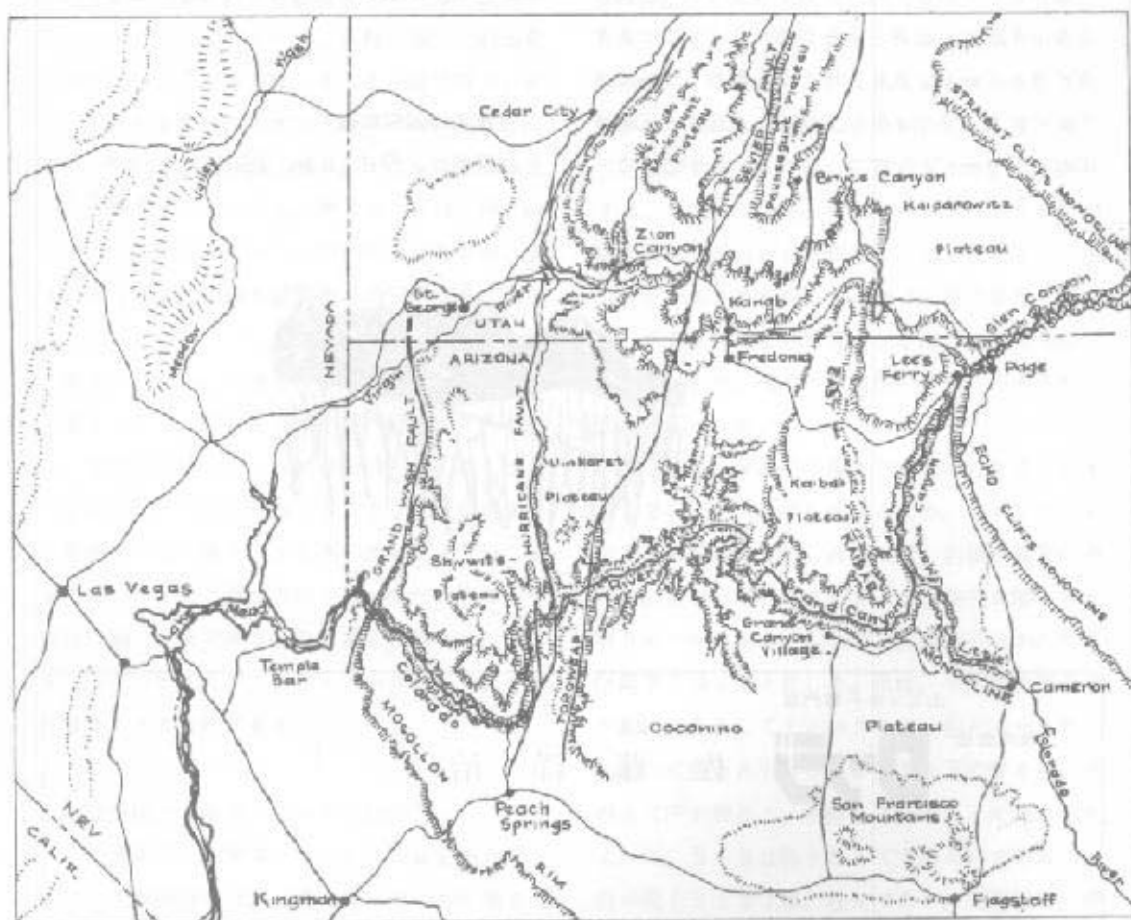


コロラド河航行 1973年

前田 修

GRAND CANYON 周辺

COLORADO RIVER GUIDE



0 25 50 75
Scale in Miles

《はじめに……》

コロラド河航行、即ち海外遠征は、ボート班に於ては、長年の夢であった。過去に我々は、黒部川上の露下・下の露下の完全航行、飛騨川の飛水峽、四国吉野川、九州球磨川等々、あらゆる河川に挑戦し、また経験を積んできた。水量が増えたと聞けば、ゴムボートを担いで出かけていったものである。黒部川を頂点として、国内の河川のめ度しい所はほとんどやってしまった。「次はいよいよ外国の河をやってみよう」と、資料を調べて行く内、コロラド河が目につけられた。

この計画は11代引地氏、13代水野氏によって企画され、1973年によりやく実現したものであります。当計画実行にあたって、探検部O、B、現役、その他多数の方々にご援助、御協力をいただきましたこと、この誌面を借りまして厚く御礼申し上げます。

《コロラド河概略》

コロラド河は、ロッキー山脈の西斜面に源を発し、アメリカ合衆国南西部の大河となってカリフォルニア湾に注ぎ込む。全長2,300km・流域面積約620,000km²の河である。コロラド河によって造られた峡谷グランドキャニオンは、延長347km・幅6~29km・台地面からコロラド河の水面までの高度差は1.6kmである。全く人というものを寄せつけなかったとの急流は1869年にJohn Wesley Powellによって下られ、以来多くの探検家の夢を、今日もなお魅了し続けている。

《隊員構成》

隊長	引地 尚	11代
渉外・装備	前田 修	14代
食糧・会計	渡部里美	16代

記録・医療・気象 吉野福男 17代

通信・撮影 野村秀明 17代

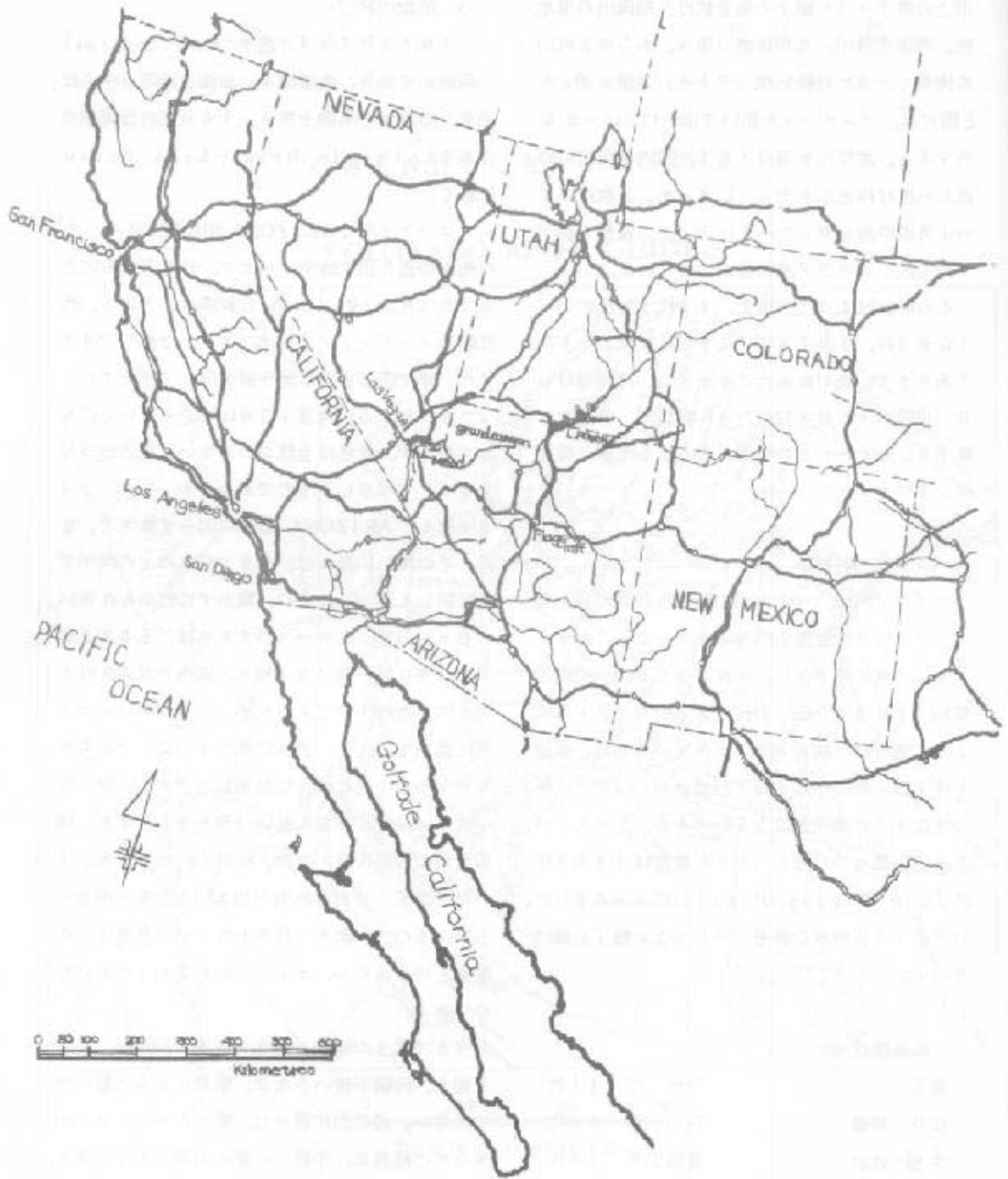
《活動内容》

1973年7月4日渡米(Los Angeles)現地にて渉外、食糧調達、装備運搬等を中心に、出来る限りの準備を整え、16日航行出発地点であるColorado River・Lees Ferreに着く。

コロラド河はARIZONA州に流れ込み、その流れの造り出し地形は広大で、目を見張るばかりであった。ARIZONAの砂漠は、今にも、西部劇のインディアンでも出てきそうに感じてあり、また、車で走る道路は地平線に向かって消えて行くような気がする。時速130kmで走っているにもかかわらず、景色は全然かわらない。何と地球は大きく、すばらしいものであろうか……。コロラド河も、ARIZONA砂漠に劣らず偉大で、また、その激しい流れは、今まで日本のどの河川でも経験しえなかったもの、驚かすにはいられない。我々が用意したボートの大きさは、5.332M×2.990M・高さ0.7Mで、国内の河川にはとても向かないものであったか、今、このコロラド河に浮べてみると、流れに舞う木の葉としか見えなかった。小生は今回は装備担当であり、ボートのサイズ決定に非常に長い時間を要し、また、隊員全員による改良、改善、検討が行なわれた。それは、欧米と日本の河川の根本的な形態の相違から来るもので、欧米で行なわれている激流下りの感覚というものが、まるでつかめなかったからなのである。

今まで我々の経験してきた日本の河川は、距離も短く、河幅が狭いうえに、季節による水量の差が大きい。必然的に我々は、最小のボートで、出来るだけ軽量に、小回りの効く方向でやってきた。

概念图



そのために用いてきたのがバドル形式であった。ところがアメリカでは、河川の幅が広く、その上極端な水量の差がないため、彼らはオール形式でボートの重量をできるだけ重くして、帯水艇のように波頭をつまき進め方法をとっている。

今回の遠征では、今までの我々の持つ経験を生かすためにも日本式バドル形式をとる必要があった。そのために予想できなかったマイナス点も多くあらわれた。第一に我々の行なりバドル形式ではボートの移動をスムーズにするために、軽量化が必要であり、食糧の軽量化、日程に対する様々な問題があった。第二に、特任のボートの側面が高く、スムーズな行動がとりにくいこと。第三には湖でのスピード化を考えねばならなかった。(そのために最終的に船外機を使用した。)第四に、一度航行を開始したら容易に脱出できない地形であり、ボートの損傷や、ガソリンの最少必要量の割り出しを行なって、積み込まねばならなかった。第五に、コロラド川の波長の長さ等の詳細なデータをもとに、ボートの長さ、幅を決定する必要があった。以上のような事を今にして思えば、我が国とアメリカの河川の違いや河川探検の歴史の浅さを痛感する。

コロラド河は各々の瀬の難易度を、Grade 1



から10までの等級に分けて示されている。だいたい、Grade 5以上は要注意であり、7以上となると、相当に気を配らねばならない。

(Gradeは瀬の速さ、長さ、障害物等、総合的に判断された上で決められたものである。コロラド川にはGrade 5以上の瀬が100近くあり一日一日の行動は、緊張の連続であった。

Grade 10と言われる類はラバホールラビッド、クリスタルラビッドの2つで、これらの瀬には、数時間をかけた偵察と協議の後に、Goが出されるのである。

1日で進む距離は、もっともかせいだ日で28哩少ない日で、11哩で、景色はほとんど最初から最後まで断崖絶壁の赤い土で、いつも同じ所にいるような感じだった。日中は40度近い酷暑で、頭がガンガンする。かといって水は飛び込もうものなら、雪解けのコロラドの水で手足の感覚が、なくなってしまいくらいであった。幾度か困難な状態に陥った我々を支えていたのは、チームワークだった。

全行程450km 18日間の航行であった。

私にとって河下りは、趣味である。と言え、それだけだが、今回の遠征はそれ以上の何かを考えさせられた。その根底にあるのは人の和、自然の大きさであろうか。河下りほど楽しくて有意義なものはないと思う。今後も、河下りを発展させ、もっともっとすばらしい計画を実現させて行きたいものである。

